

法羅吾国

度羅山度羅吉どこにいる

ここにいる

何か用かい

用じゃない

用がないなら呼ぶんじゃない

法羅吾には王伽羅と名乗る種族が居住している。王伽羅は四つの部族に分かれている。枕君族、弟府茶族、望琉族、度羅茶族である。

最初に来たのは枕君族である。このため枕君族は王伽羅最古の部族として、現在でも他部族から畏敬される。枕君族は巨体で、四角い顔を特徴とする。

枕君族は法羅吾南部の温暖な地に住み着き、そこを都とし、聖地とした。都では色とりどりの建物が立ち並び、その姿を誇示する。都の界限にはあらゆる人種がいた。学生、僧侶、商人、職人、労働者、公務員、あらゆる人間がひしめいていた。

公園にはクネクネした散歩道がいくつも延び、あちらこちらに彫刻を施したベンチが置かれている。散歩道には木陰が多く、しっとりとした砂が敷き詰められていて、散歩するにも快かった。

王宮には、庭の中に小さな池を掘り、池の中に小さな島を築いた。庭園は精緻な細工物の景色を見るようである。全土から集められた珍しい植物が、それぞれの生活環境に合わせたガラス張りの温室の中で大切に育てられている。

枕石磨蔵が族長である。そして枕君族の族長は、慣例により、代々法羅吾国王を兼ねている。しかし磨蔵は、王が人の上に立つのはただその持つ階級や権力ばかりではなく、その気高き心と不拔なる精神によるものであることを印象付ける存在である。

紺色の肌をしていて、よい香りが漂い、高貴な気品に満ちている。温厚で寡黙、冷静沈着である。優れた頭脳の持ち主だが、何かを決める時は慎重で、周囲の意見を尊重し、納得するまで説明を求めるのが常である。大きな問題が発生した時でも通常通りに問題発見・問題解決のプロセスを走らせることができ、同時に他者に対して、しっかりと納得性のあるメッセージを発信する。

寝ることが趣味で睡眠時間は長い。終日蒲団から出ないこともある。

磨蔵は父枕と母枕の子である。磨蔵には石枕、竹枕、木枕という弟がいる。石枕は白い肌、竹枕、木枕は茶色い肌をしている。

次に来たのは弟府茶族である。弟府茶族は卵形の顔、肌の色は黄色と黒の縞模様を特徴としている。四部族中、最小の人口である。沢地に住み着き、そこを弟府沢と命名し、族長の姓とした。

弟府沢弟府珍が族長である。少しでも輝く火があたるとキラリと輝く黒い瞳の持ち主で

ある。誰に対してもうやうやしいほど丁寧な姿勢を忘れず、相手に誠実さを印象付ける。のんびりと過ごす時間が好きである。

弟府珍には弟府、珍具という弟と弟府子という妹がいる。

三番目に来たのは望琉族である。丸顔の特徴とする。動作は機敏で、鳥のように素早い。族長の姓は望琉川である。四部族中、最大の人口を誇り、法羅吾外にも開拓している。

法羅吾最長の川沿いに住み着き、その川を望琉川と命名して、族長の姓とした。望琉川は眠ったような穏やかな流れを保ちながら、最後には大洋へ抜ける。川の水は冷たく、氷水というより、肌をジリジリ焼く火のように感じられる。小さな魚が銀のダーツのように泳いでいるのが、水面からも見える。飛沫を上げている所々の滝は、水晶よりも輝かしい水を落とすようにしていた。

当主は望琉川望琉と言ひ、桃色の肌をしている。軽快かつ豪胆で、上に媚びず、下に優しい。開けっ広げで陽気、才気があり、雄弁だった。

最後に来たのは度羅茶族である。頭が大きく、丸顔の特徴とする。目も鼻も丸く、鼻の色は赤い。肌の色は青だが、顔と腹と手足だけは白い。部族全体をまとめる族長を持たず、4つの家に分かれている。鬼井家、度羅山家、経度村家、府若田家である。

鬼井家は度羅茶族最古の名家である。井戸を掘ったため、この姓を名乗る。現在でも法羅吾の水道事業を司っている。

鬼井雄新が当主である。度羅茶族には珍しく、黄色い肌に黒い髪をしている。情感は豊かで、笑顔は優しく憂いを含んでいて、口は形がよく、えもいわれず上品である。犬を飼っている。

度羅山家は度羅茶族四家の中で二番目に古い家柄である。鬼井家の次男が分家して興したが、こちらが度羅茶族の宗家格となっており、度羅茶大王を称する。

名勝の麓に屋敷を構え、その山を度羅山と命名し、姓とした。度羅山では、高く聳え立つ峰が天に伸び、山脈は遠くまで連なる。木の梢に雲がかかり、薄もやの中から時折、猿の鳴き声が聞こえてくる。山頂から見下ろすと、小さな湖がキラキラ光る。

度羅山度羅吉が当主である。八月一八日生まれである。均整のとれた顔をしているが、眉毛は薄く、ほとんど見えない。高い声をしており、その声は聞く者の耳に甘美な音楽のように響く。大きな口を開けて笑う。子どもの頃から勉強が好きで、二学年上の学習をしていた。鼠が苦手で、鼠を見ると失神しそうになる。赤い首飾りがお気に入り、これ見よがしに身に付けている。芝居を演じることが趣味だが、その技量は趣味の域を超え、国内にとどまらず、遠く異国にまでもその声望が知れ渡っている。

経度村家は度羅茶族四家の中で三番目に古い家柄である。度羅山家から別れた一族が、

村を開拓して定住し、その村を經度村と名付け、姓とした。經度村は二、三本の狭い道と数件の店舗がある小さいが、美しい村である。旅館では玄関を入ったところに土産物やソファを雑然と並べたロビーがある。休憩にぴったりの茶店もある。市の立つ日には集まる客を当て込んで、俄仕立ての舞台で大道芝居が演じられた。軽業や歌もあり、踊りを披露する芸人もいた。

經度村經人が当主である。よく舌を出している。動きは羽のように軽く、まったく重さを感じさせない。仮に空高く舞い上がったとしても、それほど驚かれないだろう。帽子を好み、いつも帽子をかぶっている。どら焼きが好物である。趣味は野球で、腕前は本職の選手を凌ぐ。

府若田家は度羅茶族四家の中で一番新しい家である。度羅山家から別れた一族が、大規模な田園を開墾し、そこを府若田と名付け、姓とした。府若田は温暖な気候に恵まれ、豊かな農産物の宝庫であり、法羅吾有数の穀倉地帯となっている。

府若田焚若が当主である。度羅茶族の中ではひとときわ長身である。生来の威厳に恵まれた貴公子で、物腰は堂々としている。その威厳たるや、彼が通りかかる時、並みいる他の王侯達も臣下に見えると言われたほどである。黄色い鈴を大切に持っている。

法羅吾国の中の異民族として捨伽羅がいる。王伽羅と捨伽羅の交渉はほとんどない。熊西熊子が族長で、卵型の顔、灰色の肌をしている。